



海援隊旗(二匁きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

## 巧偽 KOUGI SESSEI 拙誠

君は「風」を見たか 海舟・万次郎・龍馬

「自由」「平等」人類普遍のルール発信

風を見たことがあるか、と聞くと誰もが怪訝な顔になる。風は見るものではない、感じるものだといふのである。

しかし、梢を揺らし、波を立てさせる風を「見えない」といえるだろうか。風に感応した何かは、自らを動かす。風はものや人を動かすことによつてその実在を見せつけてくるのではないか。

今龍馬を見ることはできないが、龍馬を感じ、行動する人たちは後を絶たない。龍馬は風になった。風になった龍馬が今の私たちを動かしていくような気がする。これから三年の間「風」になった龍馬展を開催し、龍馬のメッセージを探っていく。

龍馬とともに勝海舟、ジョン万次郎を絡ませるのは、三人の視線の先に「同じ夢」が見えるからだ。求め続けた夢は、「自由」と「平等」、そして「平和」。

生まれも育った境遇も身分も違う男たちが、幕末という時代に瞬間すれ違い、同じ夢を見た。三人を巡り合せた時代の不思議とはなにか。海から吹いてくる時代の風を追う。

「風になった龍馬展」は、幕末という時代に「自由と平等」という人類普遍のテーマに果敢に命がけで挑戦した男たちの物語である。

一年目の第二弾「時代の不思議 同じ夢に結ばれて」では、三人の生い立ちや生き方を紹介し、何のつながりもなかった男たちが巡り合う時代の不思議、自由と平等への思いという共通点を見出ししていく。

今から百五十年余り前のその日、嘉永六年(1853)六月三日。

浦賀沖の江戸湾にアメリカの黒船四隻があつた。巨大な船は日本中を震え上がらせた。

一番震え上がったのは幕府である。ペリー提督は強硬に開国を迫り、老中安部正弘ら幕府はペリーへの即答を回避したが、ペリーは半年後に再来。日米和親条約が結ばれると、

下田と箱館は開港。日米和親条約締結によつて、二百年以上続いた鎖国は終わりを告げることになる。

三人の男たちにとつても、その日は運命の日であつた。

幕臣でありながら赤貧洗うがごとくの海舟は、提出した「海防意見書」が認められ、長崎海軍伝習所の二期生から軍艦奉行への道を踏み出していく。

漂流民・万次郎はアメリカの捕鯨船に救われアメリカ事情を知ったことから、漁民から幕府直参旗本へと召し上げ

られる。

経済的には裕福ではあるが強烈な身分差別の中、土佐の下級武士として育った、龍馬は黒船に遭遇したことによつて日本を意識し、民主国家アメリカへのあこがれを抱く。

時代は、バラバラな場所にいる男たちをつないでいく。身分や肌の色を越えたボーダレスな場所、世界をつなぐ海。そこに境界はない。幕末という時代と三人の生い立ちを絡めて、「時代の不思議」を探る。

前田 由紀枝

**風** 風になった龍馬展 VOL.1

時代の不思議

高知県立坂本龍馬記念館

2009年10月10日(土)～2010年1月11日(日)

SAKAMOTO RYOMA KINENKAN

勝海舟・ジョン万次郎・龍馬 同じ夢に結ばれて

781-0262 高知市 城前830 TEL:088-841-0061 <http://www.ryoma-kinenkan.jp>

午前9時～午後5時(閉館) 年中無休 入館料 一般500円 特別700円(2～10歳) 高知市立市民会館

# 台湾李登輝元総統が来館

## オーラに包まれて

### 高知の風土、情熱に心打たれる

台湾の李登輝元総統が9月6日、夫人の曾文恵さん同伴で坂本龍馬記念館に来館された。李元総統は自他共に認める龍馬ファンであり龍馬通(つう)。それも単なるファンではなく龍馬哲学を自らの人生に重ね合わせながら歩む姿に日本にも多くの支持者がいる。



高齢を思わせぬ足取りでさっそうと

前日の東京講演を終えた李元総統は午後二時、空港からまっすぐ龍馬記念館に。記念館前で一般の人たちや、館の職員の手拍子に迎えられて館に入った。八十八歳のご高齢には見えぬ足取りである。長身の李総統のそばには曾夫人がそと寄り添っていた。

まず講義室で、館に寄託されている「海援隊約規」龍馬の手紙二通、それに龍馬の長姉、千鶴から伝わる懐剣などを学芸員が紹介。続いて常設展示室を駆け足で回り、薩長同盟の龍馬の裏書、龍馬の新婚旅行の手紙など見学されたが、絵入りで有名な新婚旅行の手紙の前では、なんと李元総統が奥さんに手紙の内容の説明である。文章の意味はもちろん、龍馬が手紙を書いた幕末という時代背景まできっちり。館の学芸委員も思わず聞きほれる「名ガイド」振りであった。

二階では企画「戊辰戦争展」、

桂浜の龍馬像の原型(本山白雲作)に足を止めた。「海の見える・ぎやうりい」では、書家・藤田紅子さんが制作した六曲屏風仕立ての龍馬の「日本洗濯の手紙」臨書作品の前で藤田さんと気楽に記念撮影した。

そして最後は、龍馬の見た海。はるか水平線を眺めながら入館者が龍馬宛に書く「拝啓龍馬殿」コーナーで熱心に鉛筆を走らせた。そばに居る人に誰にでも分け隔てなく熱く語りかける姿勢はまさに龍馬。明治以来大変革期を迎えている日本に志を高く持った若者の出現「行動」を語った。

他の入館者の皆さんも李元総統を館内ガイドのように付いて周りを傾け「やっぱり、歴史に残る人には包み込むようなオーラ



李元総統は学芸員も驚く「龍馬つう」だった

を感じますね」などと話し合っていた。

森 健志郎

李登輝元総統が残されたメッセージ  
 拝啓龍馬殿  
 2009年9月6日  
 天下で指導者になりたい人が沢山居ります。併し指導者になれる人は多くありません。まして、指導者として大きな功績を残す人はほとんどありません。龍馬先生は近代日本を指導しに天から降りた人でしよう。龍馬先生の精神的偉大さは、記念館に来て見たり聞いたことによって、一層その偉大さに頭が下がる一方です。龍馬をつちかった高知の風土と人間的情熱にうたれました。  
 李 登輝 曾文恵



拝啓龍馬殿にメッセージを書く李元総統

## 龍馬の望まなかつた戦争

### 「戦争とは？」人気の「戊辰戦争展」展示品も迫力

戦争の評価というものは、勝者が自分たちの都合のよいように作り上げる。今年のNHK大河ドラマ「天地人」はいよいよ佳境に入り、関ヶ原の戦いの場面が描かれ始めた。これを見ていると、戦国時代と幕末はやはり似ている所があると感じる。「天地人」では、家康が何とも憎たらしく描かれている。しかし江戸時代以降、家康に対抗した石田三成は、通常悪く描かれるケースが多い。これは当然のことで、関ヶ原の戦いの勝者である徳川家によって、都合の良いように歴史が作られたためである。今回の「天地人」は石田三成と親友だった直江兼続が主役なので、家康が憎たらしく描かれるのだ。

#### 龍馬のスタンスで

戊辰戦争もこれと同じで、見方次第で評価が変わる。戊辰戦争という皆さんは何を思い浮かべるだろう。やはり悲劇の白虎隊や新選組の土方歳三、赤報隊の相楽総三などではないだろうか。

本展は、このような人たちの展示や新政府中心の展示を期待して来られた方には拍子抜けだったかもしれない。なぜなら、本展は龍馬の思想に基づき、戦争は必要なかった、というスタンスで展示を行ったからだ。新政府側からでも旧幕府側からの視点でもない。龍馬は「もうつまらぬ戦は起こすまい。つまらぬことにて死ぬまい」と誓っており、日本人同士の戦いは無意味だと考えていた。龍馬は旧幕府方の人々も納得のいく新しい世の中を創りたいと考えていた。このような龍馬の考えをぜひ知っていただき、必要な戦争というものが本館にあるのかを来館者の方にも考えていただきたいかった。

土佐藩、特に五代目藩主・山

内容堂の意向も龍馬と同様、戦争は避けたいという考えだった。ぎりぎりまで戦争回避の方法を模索し、鳥羽伏見の戦いが始まった。でも容堂は土佐藩兵に参戦を禁じていた。鳥羽伏見の戦いは薩長と会津の私戦だと容堂は位置づけていた。

#### 小島捨藏の御子孫か

本展では、龍馬の平和倒幕思想を表す新政府綱領八策をまず展示し、それと対比する形で中岡慎太郎の「時勢論」を展示した。慎太郎をはじめ、薩長がなぜ戦争を必要と考えていたのか。そして、龍馬と慎太郎の死後にどのような動きから鳥羽伏見の戦いが

土佐藩が武力倒幕に反対だったのには大きな理由があった。山内家は三代豊熙が嘉永元年(一八四八)六月に急死したのち、豊熙の嫡子篤弥太も病弱なため、弟の豊惇が継ぐことになった。しかし、豊惇も養子願が許可されず、直後に急死してしまい、山内家は家督断絶の危機に陥る。そこで白羽の矢が立ったのが、南邸当主の豊信(のちの容堂)だった。山内家は豊信の死を秘して隠居の形を取り、三歳の豊信を養子に迎えた。この危機を乗り越えられたのは、縁戚関係の薩摩藩主島津斉彬や福岡藩主黒田長濤、宇和島藩主伊達宗城らが老中阿部正弘に周旋してくれたお陰であった。こうした事情に加えて、関ヶ原の戦い後掛川六万石から土佐一國を与えられた藩祖以来の恩義もあり、容堂にとって徳川家を討つということは到底考えられないことだった。

起こっていくのかを展示した。そして、静観していた土佐藩が戊辰戦争に巻き込まれ、会津戦まで従軍していく様子を、当時の土佐藩関係資料から見えていった。今回は、土佐藩で板垣退助を中心として組織された迅衝隊の二番隊長・小島捨藏の御子孫からライフル銃など二〇丁をお借りした。ゲベル銃からミニエー銃など、ライフル銃の歴史がよく分かり、新政府軍と旧幕府軍の戦力差を知る上で重要な資料だった。しかし、最新式で七連発のハンサー銃だけが無かった。そうしたところ、展示の一日前に、谷作七の御子孫から家に七連発のライフル銃があり、戊辰戦争時に買求めた物だとお聞きした。催し物案内を見てこの展示を知り、お声をお掛けくださったのだ。偶然にも谷作七は小島捨藏と同じ迅衝隊二番隊長に所属していた。しかも、小島捨藏が負傷帰国した後、代わりとなつて二番隊長を指揮した人物なのである。偶然に驚きながら、お話しを伺った所、軍服や打裂羽織なども御所蔵とのこと、これらも展示させていただいた。



連日大勢の入館者でにぎわった

は龍馬以外で展示を行うと来館者の興味が薄れるという欠点がある。龍馬のことを深く知りたいという来館者の思いが強いため、しかし、龍馬の本質を知るためには、時には龍馬から少し外れてみる必要がある。戊辰戦争展は、夏休み期間中だけで、既に三万六千人以上の方にご覧いただいた。龍馬死後の事件ではあるが、戊辰戦争を知ることによって、龍馬の平和思想を深く知っていただけたのではないかと思います。

三浦 夏樹

# 変わってきた日本人の顔・現代人は美形になり… 消えた“気骨顔”



(株)福家スタジオ(高松市)  
代表取締役 福家 嘉孝  
(香川県営業写真家協会会長)

— 写真黎明期のおはなし —

私たちの頃の高松では、小学校の修学旅行は高知だった。お決まりの桂浜へも行き、坂本龍馬という人物の巨大な銅像に強烈な印象を持った。この後坂本龍馬の名が出る、この銅像が私には原点になり、気になる存在だった。

写真の初めが日本では幕末、通説では薩摩藩主島津成彬(篤姫の養父)を撮った銀板写真が最初、そしてその日1841年(天保12年)6月1日が写真の日になったのだが、それ以前にも撮られていたというのが本当のようだ。後にその撮影者上野俊之丞の息子彦馬が1862年長崎に写真館を開業、横浜で同時期に開業した下岡蓮杖と共に日本最初の写真館である。因に彦馬の弟子富重利平の写真館は熊本に現存している。富重写真館が明治初めから、熊本の風景、人物等を撮った貴重な写真は、西南

戦争で消失した熊本城の再建計画の貴重な資料にもなったのである。そういう意味でも写真の持つ役割は重大である。余談だが2005年、英国ケンブリッジ



龍馬一番人気の立像

市にとって貴重な資料となった。老朽化のため明治17年に取り壊され、たった一枚の写真しか残っていなかったことから、素晴らしき贈り物になった。

大学図書館に所蔵されていた天守閣の写真が名古屋城と記述されていたがどうも違うようだ。と調べた結果、高松城と判明。天守閣の再建を計画していた高松

さて龍馬像の元になる写真は、長崎の上野彦馬の写真館で撮られたものであるが、撮影はどう

## 龍馬像は

も弟子が撮ったようである。レンブラントと同じく工房と考えると良いのかも。とにかくその頃写真を撮ることは、撮る方も撮られる方も大変である。乳剤も感度が低く、またレンズは暗い。かのNHKの「篤姫」でも何度か写真を撮るシーンが出て来たが、シャッターの無い時代、レンズの前に蓋をしておき、おもむろに蓋を取り露光時間をかけ、また蓋をするという長時間露光である。勿論その間は動けないので、後ろに首かせを置くのである。今やデジカメでかなり暗くても写せる時代、とても信じられない事だろう。また貴重で高価であったから、誰でも写真を撮られる時代でもなかった。その上日本人には、写真を撮ると魂を取られるとか、3人で写すと真ん中の人は死ぬとか、とかく迷信を作っていたようで、一般の人々にまで普及するには時間がかかったようだ。皆さん馴染みの昔の写真は、色黒く写っているものが多いのに気づきますか？ 実は今のフィルムは全部の色に感じるのが当たり前ですが、昔は青感性と言って青の光にだけ感じて写り、顔色に多く含まれる赤の光には感じず、結果写真には黒く写るのである。

近頃の政治家は？  
人物写真を撮す仕事をしていて気がついたのは、日本人の顔が変わってきた事。幕末明治の肖像写真を見ると、武士、政治家、文化人、芸術家、経営者等一人一人の顔に個性と信念、自分で作ってきた顔がある。いわゆる、気骨が顔に表れているという事。近頃は、若い人たちのスタイルは良いし、顔も男女とも美形になって来ている。私たちがどちらかを被写体として興味を持つかと言えば迷わず前者になろう。きれいでなくともいわゆる面構え、何かそこから発信しているように見える。それだけ自分の行動、信念に揺るぎが無いのだ。翻って近頃の政治家達の迷走ぶりは、その逆に全く国家を背負う気概も、命をかけて国に奉仕するという信念も無いように見える。龍馬の有名な右手を懐に入れて、写真等の顔は、私等ほればれし、眩しいくらいで、すうと遠くを見ている目が、日本の将来を見据えているように見える。「たれば」は無いが、もし龍馬が明治に生きていれば、現在の日本はどう変わっているかというの、興味深い事ではないだろうか。

## 子どもコーナー完成!

# イベントも盛りだくさん!



子どもコーナー

やすく説明。図書コーナーには子ども向けの龍馬本を集めました。小さなお子さんにも楽しんでいただけるようにと、職員手作りの龍馬パズルも用意しています。

夏休み開始と同時に登場したこのコーナー、子どもたちにも大人気で、お兄ちゃんやお姉ちゃんが、弟・妹たちの面倒を見ながら勉強している様子をよく見かけました。その間に、お父さんやお母さんは龍馬の手紙などの歴史資料をじっくりと読めるというわけです!

大人の方でも龍馬初心者の方には分かりやすいと好評いただき、9月からも引き続き、子どもコーナーを設置することになりました。内容も検討しながら、より良いものにしていきたいと考えておりますので、龍馬記念館にお越しの際は、2階子どもコーナーにもぜひお立ち寄りください。

尾崎 由紀

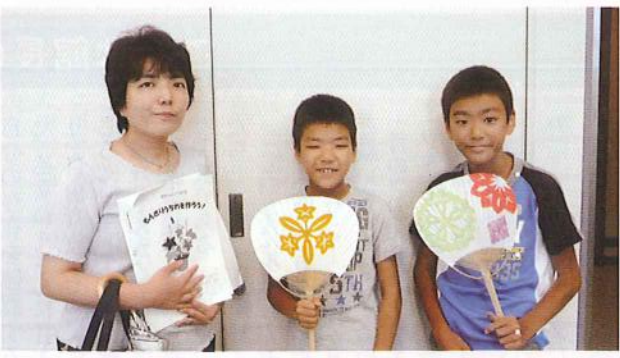
2階の子どもコーナーに続き、子供達に楽しんでもらおうとの夏、館では夏休み子ども教室を行いました。8月1日と22日に行われた教室には夏休み期間ということもあり、お父さん、お母さんと一緒にたくさんの子供達が参加してくれました。

1日の「もんきりうちわを作ろう!」では、江戸時代の紙切り遊びである紋切りを貼ったうちわを製作。色紙を折って模様通りに切って作っていく紋切り作り。製作過程の多い内容に、みんな頑張って作ってくれるかな...?と作り方難しくないかな...?と最初ドキドキしながら見ていた担当ですが、作り始めてすぐに



職員手作りの龍馬パズル

楽しみながら作っていく子供達の姿が目に入ってきました! 小さなお子さんでも上手にはさみを使って素敵な紋切りうちわを作ってくれましたよ。世界に一つのオリジナルうちわに子供達みんな満面の笑顔でした。



素敵なうちわを披露してくれました!

らモバイル作りに励んでいました。教室をやってみて驚いたことは、子供達の感性の素晴らしさ! 思ってもみない色使いであったり素材の使い方にハッとさせられることが多々ありました。帰り際に見せてくれた子供達の満足そうな笑顔と「楽しかったよ。またやってみたい。ありがとう!」の言葉。子供教室をやった良かったと思える瞬間です。これからも子供達が楽しめるような子供教室を企画し、回を重ねていきたいと考えています。

山中 真優



モバイルのパーツに色ぬり中

子供達も苦戦...「こっちの方が重いから反対側にパーツを増やしてと...」親子で考えなが

この夏、龍馬記念館に子どもたちの元気な声が響いていました。当館には、年間二万五千人もの子どもたちが訪れます。その子どもたちにも楽しみながら龍馬のことを勉強してもらおうと、2階展示室に子どもコーナーをつくりました。

パネル展示では、龍馬が生まれてから亡くなるまでの33年間の出来事を子どもたちにもわかり

# 拝啓 龍馬 殿

154通

6月21日～9月20日

昔「高知は田舎やき」と口にしたりとき、父親が「東京は遠いけど、この海の方こそはアメリカや」と言っていたことを覚えています。太平洋を見て育った父親もスケールの大きさは龍馬に通ずるところがあるのかなと感心させられます。ここにきて早10年になります。最も近い距離で龍馬に会えた気がします。現在書道教員として勤務していますが、気が付けばいつも龍馬の話を口にしてる私がいま。これからも高知を誇りに思っ子どもが少しでも多くなることを期待し、龍馬の魅力を伝えて生きたいと思います。

7月4日 高知 S.M 29歳 女性

今回初めて高知を訪れました。龍馬さんが見た景色はとも素晴らしく、心が大きくなった気がします。あなたの大きな生き方、志、全てが呆れるほどに清々しく、私も大きな生き方をしたいと思っています。仕事やプライベートで色々なことが起こりますが、大きな心と高い志を忘れず、清々しい人生を生きたいと思います！

7月13日 東京 T.I 28歳 男性

私が龍馬さまと深く出会ったのは、今私の横に「龍馬ファン」のおかげです。今日は龍馬さまのお気持ちと過去に触れることができ、感激でたまりません。

日本史上、あなたほど男らしく、優しく、自由な人はおらず、私が敬愛することが出来る偉人はあなただけだと思います。もし同じ時代に生まれていたら、二人で桂浜を散歩したかったです。残念ながら出会うことはできませんでしたが、となりにいる人が、あなたのようなドラマチックな人生を送ってくれるよう祈るのみです。かしら

7月13日 神奈川 S.K 30歳 女性

龍馬を訪ねて二回目の高知。あいにくの雨だけど坂本先生の像に会えて心が晴れました。今もまた悩んで苦しむけれど、先生のように大きな意思と目標をもって生きたいと思えます。小さなことで悩むより、大きな目標に挑めと言われた気がします。また高知に帰ってきます。

7月21日 神奈川 H.T 31歳 男性

16年ぶりに坂本さんと再会できました。涙が出ました。いつもいつも坂本さんは私に声をかけ、励ましてくれていました。でも今日は本当に直接声を聞けたみたいなんです。私も坂本さんより10歳も年上になっしまいました。職場でもつこの娘の誕生日。今夜はあなたのことを語りながら、高知の地でお祝いしてあげます。そして明日は主人の故郷長崎にて亀山社中跡地など見学してきます。今年はいよいよ自由研究が出来上がりそうです。

8月12日 鹿児島 R.M 36歳 女性

私たちが夫婦の縁結びの神様である龍馬さま。今回で三回目の高知来訪です。この度は11歳の長男と、9歳の次男と、夫と四人で記念館を訪れました。二人の息子さんには龍馬さまのように大きな志を持って人生を歩んでほしいと願います。また来年も桂浜に参りますので、この一年のご報告をさせていただきますね。

8月20日 兵庫 N.H 45歳 女性

一度は来たいと思い、何十年かけてやって来ました。私の心が人を動かす、今の政治家の人たちに龍馬さんの心意気、空から伝えてください。やはり生きていてほしかったですね。またいつか、孫と一緒に来ます。

8月27日 埼玉 Y.A 62歳 女性

現在の日本にあなたのような人物がいたらなああと深く思います。現日本の国政や政治不振をあなたならどんな方法で解決していくのか？そして新しい発想を作り出すのか？大変楽しみです。そして日本の若者に対しての尊さや人生の大切さ、母国を愛する気持ちを今一度教えてほしいと思います。もう一度、日本を洗濯してください。

8月28日 愛媛 K.N 32歳 男性

部署を任されています。新しいプロジェクトの度に部下をまとめていくことの大変さを痛感します。そんな時、坂本さんが「おまんが揺れてどうするぜよ！」と激励してくれま。今日は仲間と自分を信じる勇気をいただきました。ありがとうございます。

7月29日 埼玉 S.M 43歳 男性

昨日は新幹線で京都から兄9才と二人で高知の曙町に住んでいるおじいさんの所にやってきました。生まれて初めて親たちと離れて子どもだけで旅をしました。小学校二年生です。もう少し大きくなったら二人でどこへも行けるようになりたいです。

8月6日 京都 H.N 6歳 男子

貴方に初めて出会ったのが大学時代、もう25年になります。出会ったときの衝撃は今も忘れていません。貴方の生き方、考え方、感じ方に憧れて目指していましたが、今もつて普通で普通の会社員をしておりません。しかし、私の血の中には龍馬さんのDNAが混ざっていると感じています。すでに47才になつていたので、龍馬さんになることはできませんでしたが、いつも体のどこかに貴方を感じながら生きて行きます。

8月8日 愛知 A.K 47歳 男性

生まれて初めての四国への家族旅行にきています。主人と高の娘、中二の娘と私の四人です。四国でどこを一番最初に回るかで、家族会議をした結果、中二の娘が「坂本龍馬に会いたい」といって、まず桂浜のあなた様の銅像に

この歳になつてようやく桂浜に來ることができ、大海原を見つめる龍馬に出会え感激しています。NHKの大河ドラマで「龍馬がゆく」に出会ったのは小学生の頃、その原作に出会ったのは大学生の頃、30代には子どもたちとともに龍馬の暗殺に関わるオリヰナル劇「幕末異聞」を創作し演じました。ここ一、二年前にも久しぶりに原作を読み返しました。何回龍馬に出会っても、心底ほれてしまいます。こんな人物が日本史上にいたなんて。昨年病死した妻と一緒に来れなかつたのが残念です。

8月29日 滋賀 E.K 54歳 男性

夏休み最後の日曜日、普段どこかへ行くことがあまり言わない息子が「龍馬記念館に行きたい」と、姫路から車をとほして4時間、偉人に興味を持つというところは私は良いことだと、これを機に行動力のある人間、龍馬みたいな人を目指してもらいたい。

8月30日 兵庫 J.Nの父

## \*\*\* 編集者より \*\*\*

今回の拝啓龍馬殿に目を通して浮かんだ一言は「再会」でした。全国の龍馬を愛する人々にとって龍馬は、頼れる兄であり、いつも見守ってくれる母でもあり、何でも相談できる親友でもある。そんな人々と龍馬の再会に立ち会うような気持ちで読ませていただきました。以前にも拝啓龍馬殿にメッセージを寄せてくださった方のお名前をおかけするにつけ、こちらも、古い友人と再会したような気持ちが出てうれしく感じます。

## ここは館長の部屋 森 健志郎

### 難しい”土佐弁“

朝一番の飛行機で東京に出張した。出る時はいい天気だったのに、羽田は曇っていた。それに、高知より寒い。事前の指示通りまず電車で「品川」まで出て、そこから「渋谷」へ山手線だ。人波を泳ぎ渡ってやっと京王バスに落ち着く。目指すは新宿経由の中野である。ほんやり窓外を眺めていた。

くねくねと車体をゆすぶったバスの右手に突然NHKの建物が見えた。緑の中でコンクリートのアナグマを連想させる建物の形状は昔とあまり変わらぬと思った。そうだ、今日の出張もNHKと無関係ではないぞ。大河ドラマ「龍馬伝」がきっかけなのだから。頭でそんな声がつぶやいた。この日、なぜ「中野」なのか。実はCD制作のための録音作業を行うためである。龍馬記念館は11月「朗読・コンサート」なるイベントを企画している。女優の小林綾子さん、シンセサイザー奏者で作曲家の西村直記さん、それに館の女性スタッフが加わる。背後を作家、藤田紅子さんの龍馬の手紙を臨書した六曲屏風の作品が固める。しかし、主役は「龍馬の手紙」。それも、龍馬が三歳年上の姉乙女に宛てたものだ。池田屋事件、薩長同盟、大政奉還。人の命をあつさり犠牲にしながら幕末という時代が回る。龍馬は自分の存在を確認する手段のようにせつせと手紙を書いた。乙女ねえさんに甘え、からかい、たまにお説教してみた。自由奔放。その奥に時代を見抜く冷静な眼差しを感じる。研ぎすまされた感性のなせる業だろう。

小林さんが乙女になって龍馬の手紙を読む。姉が弟からの手紙を読むのだ。本来なら私信だから、人前では読まれぬ手紙である。21世紀、龍馬もそこまでは思いが及ばなかつたらしい。スタジオに小林さんが入る。一人きりだ。こちらの部屋で技術屋さんと私が待機する。私の役割は土佐弁のチェック。「テイクワン！」の声がスタートの合図で、ツー、スリーと続いている。うまくいかぬと数が増える。「土佐弁では「ツキ」と小林さんが改めてチェックしていく段取り。「土佐弁は難しいですね。午後2時過ぎての昼食をとりながら小林さんは額の汗を拭いておられた。結局、丸々12時間。それでも完璧とはいかなかった。11月の完成を目指して、まだ山は6合目か。

森 健志郎

## 「龍馬の生家が焼け落ちた日」



よこすか龍馬会・会長 藤井 親さん (ふじい ちか) 談

私は子どものころ、高知市本丁筋丁目(現・上町二丁目)に住んでいました。我が家の前、電車通りを隔てた南側は、陶器店を営む金子さんの家でもとは坂本龍馬が生まれ育つた家でした。当時は商店部分を増築していたようですが、子ども心にも風格のある家で、奥行きのある家の薄暗さと湿度を含んだ空気、店先から見た瀬戸物の展示ケースなど今でもはっきりと覚えています。私は低学年の頃から、金子さんの家の庭でよくセミ捕りをしました。ひと抱えもある大きな木にセミがたくさんいて、金子さんの家の女の子ともよく遊びました。昭和二十年七月四日、高知大空襲の日です。

第三国民学校(現・迫手前小学校)六年生だった私は、自宅の中庭に掘った防空壕の中で寝ていました。戦局は厳しくなっていました。やや空襲慣れたような頃です。未明(午前二時頃)、激しい焼夷弾の音でたまたま起きられ、大慌てで避難することになりました。どこに避難するのか。屋根越しに前の金子さんの家の方角を見ると、南風に煽られて火の手が広がっており、陶器を縛っていたワラ縄の火の粉がバンバン飛んできました。「金子さんの家が燃えている」と思った私たち家族は、南側はもうダメだということ、北に逃げるこ

とにしました。蔵からはしづい北側に出ようとしたとき、我が家がB29が墜落しました。先頭を逃げていた私は、何気なく後ろを振り向いた瞬間、その光景を見たのです。防空頭巾をかぶっていたためか、不思議と衝撃は感じませんでした。兄は轟音と巻き起こる風のようなものを感じたと言います。高知市街を襲ったB29大編隊のうちの一機です。高知市街が見渡す限りの焦土となった夜のことです。円行寺方面に逃げた私たちが翌朝自宅に帰ると、家の跡はまだくすぶっていました。B29墜落の衝撃なのか、我が家の門柱が金子さんの家のあった場所まで吹き飛ばされ、そのままの形で倒れていたのが今でも鮮明です。

我が家の跡には、黒焦げになったB29乗組員十二人のうち十一体の遺体が並べられてあり、憲兵が縄をめぐらせて立ち入り禁止にされていました。自宅だと言っていると聞きましたが、余りに熱くて中に入ることはできませんでした。近所では一家全滅だと思われていた私たちは、その後しばらく郊外に疎開してはいました。私は高校卒業後進学と同時に高知を離れましたが、我が家や向かいの金子さんの家、つまり龍馬の生家のことが忘れがたく、龍馬の妻、お龍ゆかりの横須賀で十年ほど前から龍馬のことを勉強しています。一年余り前には「よこすか龍馬会」会長となり、ふるさと高知へ帰る機会も増えた昨今です。

## ■もっと龍馬を理解しよう 三年後に開館20年 運営協議会開催

平成21年度第一回坂本龍馬記念館運営協議会は二日、記念館講義室で開かれ、三年後に迫った開館20周年の節目に、館として何を発信できるかなど、話し合った。

会は5人の協議会員と館側から副館長、学芸員らが出席、まず大石副館長が平成20年度の事業報告、21年度事業計画を説明した。今年の入館者状況は毎月、前年の三割増のペースできており、最終的には開館以来の入館者になる可能性も出てきた。龍馬の全国的な人気の上に来年の「龍馬伝」加えて高速道路の1000円効果がプラスされている。龍馬記念館は、今年スタートした「現代龍馬学会」による龍馬思想の普及、また、今夏反響の大きかった“子供教室”“子供コーナー”の更なる充実など、新たな目標も見えてきている。

協議員の皆さんからは、開館20周年に向けて今年から三年企画で始める「風になった龍馬」展を軸に、イベントなども含めてどう盛り上げていくかが大切だといくつか提案があった。また、目前のNHK大河ドラマ「龍馬伝」も、企画展で直接的にバックアップしていくと同時に、11月の「龍馬の手紙を読む、朗読コンサート」などを通じて、県民にもう一步深く龍馬を理解してもらわなければといった意見も出された。

三浦 夏樹

## ■藤田紅子の世界

龍馬は生涯で139通の手紙を書いています。その中から、藤田さんご自身が、心を動かされた手紙を2通選んで臨書し、それを屏風に貼って展示しました。「日本の洗濯の手紙」「蝦夷進出を断念する手紙」。うれしさ、悔しさ対照的な気持ちが、筆勢に現れています。その手紙に込められた龍馬の「思い」が感じ取れるのです。声まで聞こえてくるようです。背景の屏風に波模様が表現されています。波の上に字が躍り、龍馬の気持ちが踊るのです。グレーの波で書が映え、見事なまでの存在感を放ち、お客様を引き込んでいました。この作品は、11月14日・15日に高知県立美術館で行われる「龍馬の手紙を読む～朗読コンサート」でも使用させて頂く予定です。

そう、先に来館された台湾の李登輝元総統も、見事な臨書に「上手ですね」と藤田さんに声を掛けられ、一緒に記念の写真撮影となりました。

小島 千穂



## ■桐野伴秋さん「セドナ・奇跡の大地へ」

(写真集)出版記念展を終えて(7月1日～7月31日)

初めて耳にした言葉“セドナ”から始まった桐野さんの写真展。ぎゅらりに展示された10数点の作品の中に、その意味が写し出されていた。米アリゾナ州に広がる雄大な岩山に囲まれた町セドナの神秘的な美しさを、独特な色彩と内面から放たれるエネルギーで圧倒的に表現していた。

晴天の夕方近くになるとぎゅらりに西陽が差し込んで来る。その光が、写真集の装丁となっている作品“夕映えのレッドロック・クロッシング”と“月下に冴えるレッドロック・クロッシング”に反射し、まるで写真が輝いているように錯覚することがあった。そんな時はふと、海の見える・ぎゅらりが“スピリチュアル・スポット”になったようなそんな不思議な気分にしてくれる今回の展覧会だった。

中村 昌代



## 入館状況

2009年9月20日現在(開館以来6,475日)

◆総入館者数	2,346,939人
◆2009年度最多入館	5月4日 3,594人
2009年度最少入館	4月16日 84人
2009年度1日平均入館者数	532人
◇最多入館	1993.5.3 3,700人
◇最少入館	2004.10.20(台風のため) 8人

## 編集後記

NHKの大河ドラマに追われている。学芸員もそうだが、とにかく関連作業が増えて館は落ち着く間がない。3年企画の「風になった龍馬」展の準備もプレッシャーになってきた。そんな最中、秋風が連れるがごとく、台湾の李登輝元総統が館に現れた。「日本は変革期、地方から行動です。龍馬精神で!」そんなコメントを残された。颯爽と88歳?歳など関係ないゾ!

瞬きの間だった。館内に“龍馬の風”を感じた。「コウドウ」「こうどう」「行動!」つぶやきながら新年に向かう。(モ)

館だより“飛騰”第71号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子 氏

発行日 2009(平成21)年10月1日 〒781-0262 高知市浦戸城山830

発行 高知県立坂本龍馬記念館 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休

入館料 一般500円・高校生以下無料

身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名 高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

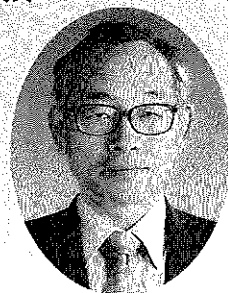
# 高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

## 私のテーマ

### 「坂本龍馬と中学生」

讃岐龍馬会塩飽社中

坂出市立東部中学校校長  
野藤 等



#### はじめに

私は大学生の頃出会った坂本龍馬の魅力に魅かれて四十年以上になろうとしている。中学校教師になってからは教室や全校集会などで龍馬の話をしてきた。子どものときは、「坂本家のよばあち」と呼ばれ、ごく普通あるいはそれ以下の子どもであったという龍馬が、今や歴史上最も人気のある人物である。優しく平等観のある龍馬は生徒だけでなく、我々教師にとっても教えられることは多い。もちろん私自身、龍馬たちが近代日本を創ったことに日本人としての誇りを感じているし、努力によって成長を遂げた龍馬に、深い共感をもって毎日を生きる指針にしている。そんな私の三十数年に及ぶ教師生活の中で、印象深い話をしてみる。



#### 龍馬を通じた生徒の成長

新人教師時代から私は学級担任として生徒に龍馬の話をしてきた。二年生のある男子生徒は、勉強にもう一つ身が入らず、授業中、居眠りをするのがあり、よく注意をしていた。ところが放課後、野球部で練習をしている様子を見て、その生徒の新しい顔を見た気がした。私は彼に、龍馬が小栗流の剣術の道場に通いだしてめきめきと腕を上げ、ついに免許皆伝になり、自信をもってたくましい人間に成長したことを話した。そして、「君も野球という特技があり、それに毎日励めば自信のない龍馬が剣術で自信をつけたように、きっとすばらしい人間に変身できるよ」と励ました。その後、その生徒には少しずつ変化が見られるようになり、三年生になったときには進路相談で「はくは〇〇商業高校に入り、甲子園に出場したい」と話すようになった。見違えるように授業態度が変わった生徒は、野球でも今まで以上に力を発揮し、見事志望校に入学を果たし、甲子園にも出場した。活躍する彼をテレビで見たとき、私は彼の夢の実現が我がことのように嬉しかった。彼はその後、高校教師になり野球部の顧問をしている。また、成績も悪くいじめにあいやすい男子生徒がいた。その生徒には、毎日のように「龍馬のようになれ!」と檄を飛ばした。高校生になった生徒は少林寺拳法に励んだ。高校卒業前に、私のところに就職の報告に来た彼は、人間として一回り以上の成長を遂げていた。見事な人間革命である。ほかにもそういった生徒たちはいるが、彼らの成長ぶりに私はいつも龍馬を重ねている。

#### いじめに負けない生徒

校長になってからは、全校集会で講話をするときなど龍馬の話をしている。特に人権尊重について話をする際は、龍馬の継母の伊与が、龍馬に言って聞かせた話は効果がある。

伊与が龍馬に言い聞かせた三か条についてである。一つめは、男は強くてやさしくなければならぬ。二つめは、人をいじめてはならない。三つめは、いじめられたら、やりかえせ。この最後の言葉を生徒に語るときは、人からいじめにあったときは、黙っておかず誰かに言いなさい、と指導している。

『坂本龍馬一隠された肖像』(山田一郎著)によると、実母が亡くなった後、龍馬は三歳年上の乙女姉さんに育てられたのではなく、武家出身の継母伊与が厳しく躰け、たくましく成長していったということで、伊与の存在は大きい。

私の専門教科は英語であるが、一時社会科を教えたことがあった。そのとき、授業の最初の行う五分間テストで、龍馬のことも出題して生徒の興味関心を高めた。例えば、「龍馬が十二歳の時、悲しいことがありました。それは何だったでしょう?! 兄が亡くなったこと、母が亡くなったこと、父が亡くなったこと」というような具合である(正解は)。

解答するとき、実母・幸のことを話すなど龍馬についての豆知識を織り交ぜた。実施一年後には、生徒は「龍馬博士」になっていた。卒業した生徒が、「龍馬の話は面白くて役に立ち、歴史が好きになりました」と言ってくれることもあった。

#### 龍馬の人間的魅力

龍馬が身分制度に反対し、身分差別のない世の中を目指していたことは、教師として学ぶべき理念である。また、生徒に伝えたいエピソードも多い。

亀山社中や海援隊長時代、隊員と同額の月三兩二分あるいは五両の支給を受けていたことは、身分制度の厳しい時代には考えられない龍馬の平等意識である。人から馬鹿にされた隊士を、「身分が卑しいものもあるが、はらわただけはきれいだ」と言った龍馬。私は目頭が熱くなった。龍馬はリーダーの理想像である。

私は時代小説家の童門冬二氏が講演で語った、龍馬の『ならイズム』に感銘を受けた。龍馬はどんな人も魅了して、「龍馬のためなら」といって支援を惜しまなかった人が多いと童門氏は語られた。これを「風度」というらしい。この「あの人の言うことなら聞こう」という『ならイズム』

いるらしい。学校現場で「いいことはすぐに実行に移す」ことは大事であり、即効性のあるこの精神は私の教育哲学になっている。

人間的な成長を遂げた龍馬の人生を生徒たちに語るとき、教育的な価値が多くちりばめられているような気がする。司馬遼太郎氏は、「龍馬は世界のどの文明圏においても共感される青春像を持った英傑」と語っているが、私は龍馬のすばらしさをこれからも、生徒に語り継いでいきたいと思っている。

があれば、人生において成功するともいう。生徒に「あの先生の言うことなら聞こう」といわれるが教師の理想であろう。

また、日本中に笑顔の種まきをしているエッセイストで“笑顔共和国大統領”の福田純子氏が講演で語った「龍馬のとりあえずやってみよう」の精神も面白い。龍馬は、人から良い話を聞くと、とりあえず実行に移ったという。物事を成し遂げるためには、龍馬のようにすばやい行動力、実行力は「とりあえずやってみよう」ということに端を発して

## 「ほれ話」 ライフワークで龍馬を語る

私と龍馬の出会いは、二十歳の頃、会社の友人から「橋詰さんは、橋原の出身や、これを読んでみたらえいぜよ。」と薦められた司馬遼太郎の「龍馬がゆく」でした。読んでみると、なるほど橋原の地名や幕末の志士の名前が登場するではないですか。たいしたもんじゃあか、けんどう、どうしてこんな山奥からたかくさんの幕末の志士が輩出されたのだろうか。などという疑問を持つようにもなり、少しずつ幕末や土佐の歴史に、そしてその時代に生きた草莽の志士たちについて思いをはせるようになっていきました。そんななかで、青二才の頃、カチンとくる事件がありました。高知県民文化ホールで司馬遼太郎さんの講演会が開かれました。中村から大雨の中を歩きに行かされたのですが、開口番司馬さんは、こうおっしゃいました。「高知の龍馬会などという人たちの中には、龍馬を自己同化させ喜んでいるだけの方もいます」「昔の土佐はたいしたものでした。これからの高知をどうするか、真剣に考え行動してください。過激な内容でして。講演を聴いていた時は、「この人は、高知に講演を依頼されているくせに失礼やないか。」と思えたのです。しかしこのことは後に土佐が大好きな司馬遼太郎さんの「心からの叫び」だったと理解いたしました。

現在の私は、高知市観光課や龍馬記念館のイベントで「龍馬脱藩の道」を何度か案内させてもらったり、龍馬記念館のカルチャーサポート（略して「カルサポ」）をさせてもらっています。龍馬が暗殺された「近江屋」の原寸大セットの前で龍馬の衣装を身にまとい、「龍馬を知る楽しさ」を来館者にお伝えしています。来館者は、子供からお年寄りまで、また、初心者から専門家まで様々です。話の切り口や内容には苦労しています。まずは、「どちらからお越しですか？」と声をかけ、龍馬との糸口を掴むことで親しみやすい身近な話題を提供するように心がけています。東京であれば千代田区品川砲台のこと、神奈川や山梨であればお龍さんや佐那さんのお墓のこと、北海道であれば坂本家や直行さんのことなど、龍馬に関する身近な話題を提供していると、お客さんからも意外なことを教えていただくこともあり、「出会いの達人」龍馬さんの利益をいただいています。

最近ですと、近江屋の末裔の方や、徳川慶喜さんのひ孫さん、勝海舟の夜叉孫さんなどとも会うことができて、「オレも、歴史のなかに生きちゃがや」と感動したことが多く、こんな具合に、休日ではできるだけ龍馬記念館のカルサポへ軽くサポートの意義もある「出勤」です。「龍馬を知る楽しさ」を多くの方に伝えることがライフワーク。「楽しいお話でした。」「また高知に来たいと思います。」と喜んでいただき、オードリーのような素敵な笑顔のお客さまと出会うことを励みに、これからも「リョーマの休日」を楽しみたいと考えています。

坂本龍馬記念館カルチャーサポート 橋詰 明仁

## コラム・龍馬のこと

### 外国にも“龍馬熱”

橋本 邦健

龍馬熱というか、龍馬の機運は益々増幅するばかり、それは来年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」に象徴されていると思う。現在、龍馬を名乗る会及び組織団体は、日本各県及び外国を含めて131を数える。

先日、知人を通じてオランダ人が面会を求めてきた。大変上手な日本語を話すことで、外国人の苦手意識も払拭され、龍馬談義で盛り上がった。日本は二度目で日本語は地元ライデン大学で学び、インターネットで龍馬を研究した大変な龍馬ファンであった。オランダにも龍馬会を作ろうとの意識に至る。もともとこれが主たる目的であったように思われた。長崎の出島、オランダ坂等と連想して意義深さを感じる。

手土産として自作の龍馬胸像（約七キログラム）を、壊れることを恐れ、手持ちで持って来たとのこと、その精巧さに驚き、その気持ちに感動した。

一昨年にはコンゴのあるメディアのディレクターと名乗る人物がやってきた。キンシャサ（首都）空港初発 龍馬空港着「やっど日本の土を踏みました」と自慢していた。コンゴにも龍馬会を作ってくれるとのこと。どうして龍馬を知ったのかと聞くとやはりインターネットであった。日本でも最近ではマンガから龍馬に入ってくる人が多くなった。合意して渡航手続きを開始したところ、内戦に加えてエボラ熱病の発生により渡航禁止区域に指定され、いまだ実現できていない。しかし、アフリカにも必要なことで、いずれ作っていきたくと考えている。

あの幕末の動乱期に万国公法・船舶等色々の物を道具として利用。短期間にあのように広範囲に東奔西走、自分の社会を広め新生日本の黎明期の幕引きをしたことは周知のとおりである。時代に合わせ、手段、方法を変えて改革、革新に向かって果敢に対座するさまはまさに“龍馬のこと”である。

## 会員便り

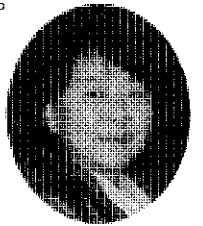
### 「ガムを噛む」

横澤 清子

あつという間に夏が終わり、もうスポーツの秋である。私の世代はなんといってもサッカーより野球の方が馴染みが深い。ピッチャーとバッターの真剣な駆け引きはやはりドキドキさせられる。ところで最近の野球を見ていると、オリンピックにせよ世界大会にせよガムを噛んでいる選手が多いのが目につく。勿論彼らが真剣にやっているのは承知の上だが、どうしても緊張感に欠けているように見えるのは年のせいだろうか。脳の血液の循環をよくして反射神経を高めるとか、平常心を保つとかいろいろ理由はあるだろう。だがガムを噛むという仕事には何か違和感を感じる。

この違和感は何だろうと考えていると、ふと坂本龍馬の妻おりうさん（お龍、お竜、お良）のことが頭に浮かんできた。もう随分前のことになるが、芸能界でも坂本龍馬通で知られる武田鉄矢が脚本・主演した「幕末青春グラフィティ 坂本龍馬」というTVドラマがあった。夏目雅子がおりうの役だったが、役作りの注文に武田はこう言った。特に時代劇らしい演技はいらないからガムを噛んでいるような感じでやって欲しい、と。当時の女性としてはやや異端なおりうさんを、ホップな雰囲気であつた武田の狙いは当たっていた。夏目雅子の演じる彼女は、グダグダ大儀名分を言っている男たちを軽くいなし、私は「わたし」と開き直る当時のおキャンな娘のものだった。

「ガムを噛む」というのは、肩の力を抜いて自分らしくという意味もあるのである。どうやら私の感じる違和感はスポーツ選手はこうあらねばならないという型にはまった思考からくるものだったらしい。



## 訂正とお詫び

先の飛騰70号(7月発行)、現代龍馬学会のページ「私のテーマ」の「『夕顔』コンピューターグラフィックで復元」=小松茂久氏=の記事中、ミスがありました。ご迷惑を掛けた関係者の方々にお詫びするとともに、訂正させていただきます。

この記事は、イギリスで建造された土佐藩船「夕顔」のルーツをたどるものです。其中で小松氏が、高知大学人文学部教授のダレン・リングリ氏に取材し「同教授が、文部科学省の科研費などを使って今年8月20日以降、渡英し夕顔の調査を行う」という内容を記事にして発表しました。ところが「文科省の科研費」については、8月時点での経費支出は手続き上からも明らかに不可能な状態なのです。つまり記事は、小松氏の思い込みによる事実無根のものとなってしまいました。その結果、リングリ氏だけでなく、関係者の皆様の誤解を生むこととなりご迷惑をおかけました。ここに紙面を借りて深くお詫び申し上げます。

現代龍馬学会会長 永国淳哉、執筆者 小松茂久